

## 巻頭言

### 「健康文化」に一つの道標を

玉木 武

平成6年の夏、7月12日に京都で「健康文化都市シンポジウム」が、健康文化都市協議会の主催で開かれた。この協議会は、平成5年度に創設された厚生省の「健康文化と快適な暮らしの町創造プラン事業」を実施する市町村、またはその趣旨に賛同する市町村の集まりで、「各々の地域特性に基づき健康文化都市構想の促進と実現」を目的としている。現在、北海道の滝川市や新潟県の新発田市など21の市町村が正会員に、準会員に埼玉県や京都、大阪など12の府県の知事が名を連ねている。しかし愛知県の市町村は全く参加していない。

このシンポジウムでは、「健康文化都市宣言」を採択しており、その中に新しい健康観を示している。すなわち「健康とは、単なる疾病にかかっていないということだけでなく、充実した日常を送り自己実現を達成するための最適な状態」と定義している。一般的に、健康観には「一病息災」とか「精神的、身体的、社会的に良好な状態」など種々の考え方があがるが、「病識がなく、充実した日常を送り得る状態」のうえに、「自己実現が達成」できることを「健康」として捕えているところに、ユニークさが伺えて面白い。

「健康文化」という考え方には、地域の関わりや地域民を含めた活動の観点を抜きにしては考えにくいと思われる。端的に言えば、町ぐるみの問題であり、さらに個人の健康観や文化観の組み合わせでもある。町ぐるみには、施設整備や住民参加のシステムが必要になり、個人には心理精神へのアプローチが求められる。

思うに当財団では、毎年9月に実施している愛知県の健康フェスティバルに、ささやかでも、当財団の存在感を示す「健康文化の道標」とでも言えるものを提示できないか。これほどの文化人を理事にお願いしている財団としては、その理念を出せないはずはないなどと思っている今日である。

(財団理事・総理府公害健康被害補償不服審査会委員)